

Ref Doc 1146

寫

樞東國際軍事裁判所

亞米利加合衆國其他

對

荒木貞夫 其他

宣誓供述書

供述者 花 輪 義 敬

自分儀我國ニ行ハル、方式ニ從ヒ先ツ別紙ノ通り宣誓ヲナシタル上、次ノ如ク供述致シマス。

私、花輪義敬ガ昭和十五年十一月十二日駐滿大使館參事官トシテ新京ニ着任以來昭和十九年八月下旬梅津將軍ガ參謀總長就任ノ爲東京ニ出發セララルニ至ル迄約四年間大使ノ下テ働キマシタ。從テ私ハ大使ノ人柄政治上ノ理想等ニ付テモ最モ知り得タ者ノ一人ト思ハレル梅津大使ハ滿洲國ノ健全ナル發展ヲ圖ル爲ニハ「一ソ一聊」トハ絶對ニ事ヲ讓サズ滿洲ノ治安ノ安定ヲ第一トスル方針ヲ樹テラレテ居リ此ノ方針ニ基イテ日本側ノ外交ニ關スル事務主任者タル私

ヲ始メ滿洲側ノ責任者タル武部總務長官下村外交部
次長等ヲ指導シテ居ラレタ。

大使ノ此ノ信念ハ大東亞戰爭勃發後愈々深メラレ着
々此ノ方針ノ下ニ事ヲ處理セラレテ居ツタ事ハ次ノ

二、三ノ事實ヲ示ス事ニヨツテモ明カデアル。

一、昭和十七年十二月中旬梅津大使ハ關東軍司令官

駐滿全權大使トシテ滿洲國ノ狀況報告ノ爲上京

セラレタガ其ノ際陛下ニ對シ「ソ」トノ關係ハ

極力平靜ヲ保ツ様努メテ居ル旨御報告セラレタ。

新京歸任後大使ハ私ニ對シ此ノ點ニ付テハ陛下

モ殊ノ外御軫念ノ御様子テ自分（大使）ノ言上

ニヨリ御安心セラレタ御模様ナルモ今後共充分

下部ニモ徹底スル様努メヨトノ御言葉デアツタ

旨ヲ述ベラレタ。

二、昭和十五年末私ノ新京着任直後關東軍情報主任

者デアツタ磯村大佐ガ大使館員ニ内話シタ所ニ

ヨルト大使ハ「ソ」事件處理ノ際部下

ニ對シ今後國境事件ハ一切中央（東京）ト聯絡

ノ上處理スル様嚴達セラレタ趣ナルガ大東亞戰

後愈々慎重ニナラレ、此ノ方針ハ滿洲國ノ各方

面ニモ具現シ、昭和十八年始頃同國ノ民政部令

トシテ國境河川ノ流水ガ滿洲國側ニ漂着シタ場

合ハ直チニ之ヲ處分セズ新京中央政府ニ報告其

ノ指令ヲ仰ギ、處理スル様國境地方官憲ニ命令ガアツタ。

三、昭和十八年始大使大連ニ出張ノ際大連警察署長ヲ「ヤマト・ホテル」ニ招致シ防牒ノ爲「ソ」聯領事館員ノ尾行其ノ他ノ處置ハ國際情勢領事館員タルノ身分等ヲ考慮シ慎重ヲ期セラレタキ旨說示シ、其ノ爲大連ニ付テハ「ソ」聯側トノ間ニ大シタ紛争モ起ラナカツタト記憶スル。

四、前記太連出張ノ暫時後大使ハ哈爾濱ニ出張シテ特務機關長土居少將ニ對シ同様ノ說示ヲ爲シタ。哈爾濱ニ付テハ「ソ」聯ノ「チタル」及「ブラゴエチエンスクル」ノ滿洲國領事館員ニ對スル壓迫問題モアツテ御互ニ報復的見地カラ多少ノ紛糾モアツタガ其ノ後滿洲國側ノ讓歩ニ依ツテ解決シタ。

五、昭和十七年六月頃陸滿獨逸大使「ワグナー」氏ガ日本ノ獨「ソ」戰加入ニ付キ關東軍ノ意向打診ノ爲、大使ヲ訪問シタ事ガアツタガ、大使ハ獨「ソ」戰加入ノ問題ハ中央（東京）政府ノ決定ニ依ル外無キモ日本ハ大東亞戰ニ專念スルノガ最モ利益ナルベシト婉曲ニ參戰ヲ斷ツタ事實ガアル。

Ref Doc 1146

宣 誓 書

良心ニ從ヒ眞實ヲ述ベ何事ヲモ欺秘セズ又何事ヲ
モ附加セザルコトヲ誓フ

昭和二十二年（一九四七年）四月二十五日

於 東京

供述者 花 輪 義 敬

右ハ當立會人ノ面前ニテ宣誓シ且ツ署名捺印シタ
ルコトヲ證明シマス

同 日 於 東京

立會人

少野 忠 作